洪水ハザードマップとは

洪水ハザードマップは、雨によって、村内を流れる木津川、山城谷川、渋久川が氾濫した場合の浸水の範囲と深さを示したマップです。マップ上に示す浸水の範囲と深さは、河川を管理している国土交通省や京都府が実施した氾濫シミュレーションの結果に基づいて作成しています。

過去の水害を踏まえ、堤防の建設などの河川整備が進み、近年では大きな水害が発生する頻度は減ってきています。一方で、地球温暖化などの影響により、近年は大雨が降る回数が増加傾向にあり、今後これまで体験したことが無い大雨が降る可能性も考えられます。

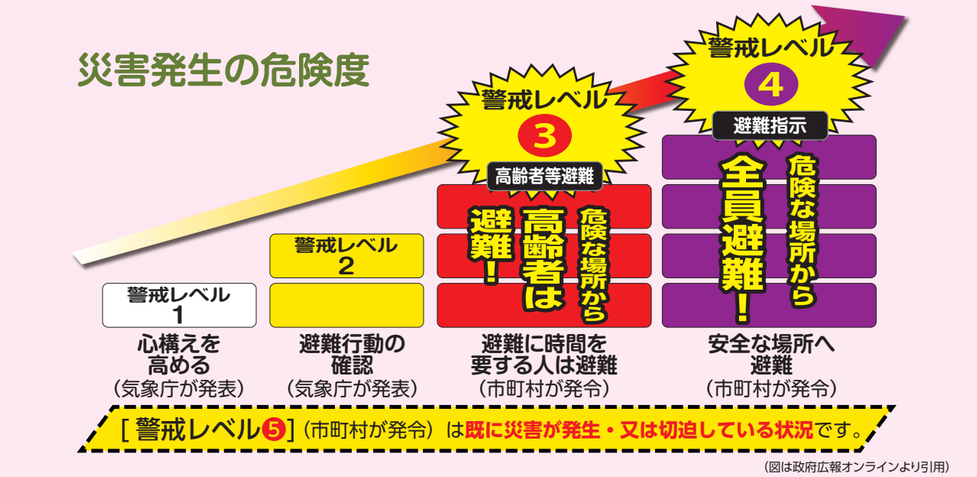
「もしも河川が氾濫したら…」を想定し、どの程度の被害となるのか、発生しそうなときに何をすればよいのか、日頃から何に気を付けて備えておくべきなのかについて考えてみてください。

過去に発生した主な水害

発生年	水害の名称	南山城村内での被害状況	昭和 28 年「南山城水害」の状況
1953 年 (昭和 28 年)	南山城水害	死者 17 名 行方不明 37 名 負傷者 95 名 住宅の流失 45 戸 住宅の全壊 62 戸 住宅の半壊 90 戸 住宅の浸水 265 戸 田畑の流失 228 町	 押原 野殿 南大河原 山城谷川
1959 年 (昭和 34 年)	伊勢湾台風		
1986 年 (昭和 61 年)	梅雨前線による 集中豪雨	死者 1 名 住家の被害 ・一部破損 5 戸 ・床上浸水 6 戸 ・床下浸水 13 戸 非住家の被害 8 戸 田畑の被害 ・流失・埋没 12.9ha ・冠水・浸水 27.8ha 文教施設 2 箇所 道路 67 箇所 橋りょう 2 箇所 河川 7 箇所 水道 2 箇所 通信施設 20 回線 農林道施設 162 箇所 農業用水路 127 箇所 林地崩壊 122 箇所	

災害が起こったら―避難行動

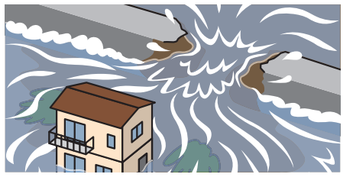
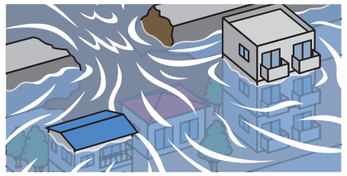
災害が発生しそうなとき、または災害が発生したときは行政などから警戒レベルが発表されます。



(図は政府広報オンラインより引用)

早期の立退き避難が必要な区域

家屋が倒壊するような氾濫や河岸の侵食が発生するおそれがある区域や、家屋の最上階も水没するおそれのある区域は、早期の立退き避難が必要な区域です。このような区域では、屋内に留まることにより直ちに命に危険がおよぶおそれがあるため、災害時は避難指示などに従って安全な場所に速やかに避難してください。

	指定区域の種類		発生する現象と避難行動	
早期の立退き避難が必要な区域	家屋倒壊等氾濫想定区域	氾濫流		堤防決壊などにより流速のはやい「氾濫流」が発生するおそれのある区域です。 木造家屋は倒壊するおそれがあるため、早期の立退き避難が必要です。
		河岸浸食		家屋が倒壊するような「河岸浸食」が発生するおそれがある区域です。 地面が削られ家屋は建物ごと崩落するおそれがあるため、早期の立退き避難が必要です。
	家屋が水没するおそれのある区域			最上階も水没するような浸水のおそれがある区域です。 屋内に留まることにより命に危険がおよぶおそれがあるため、早期の立退き避難が必要です。

土砂災害ハザードマップとは

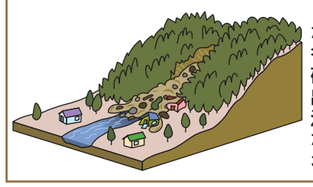
土砂災害ハザードマップは、大雨などによって、村内で想定される土砂災害のおそれのある区域を示したマップです。危険区域は京都府により調査されたものに基づいて作成しています。

近年では、局地的に降る大雨により、土砂災害が全国で多発しています。土砂災害の多くは大雨によって引き起こされますが、局地的に降る大雨の事前予測は難しく、一瞬にして被害が発生してしまいます。

「もしも土砂災害が発生したら…」を想定し、どの程度の被害となるのか、発生しそうなときに何をすればよいのか、日頃から何に気をつけて備えておくべきなのかについて考えてみてください。

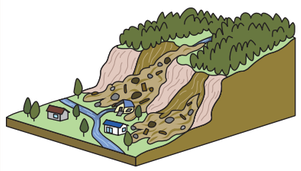
土砂災害の特徴と前兆現象

土石流



「土石流」は、大雨などをきっかけに谷底にたまった土砂や山腹から崩れ出した土砂が水と混じり合って一体となり、谷を一気に流れ下りる現象です。

急傾斜地の崩壊（がけ崩れ）



「急傾斜地の崩壊」は、大雨などをきっかけに地面にしみ込んだ雨水により急な斜面の土砂が崩れ落ちる現象です。

土砂災害の前兆現象

右図のような前兆現象に気付いたら、すぐに安全な場所に避難し、役場や警察、消防などに通報しましょう。

土砂災害の発生のおそれを知らせる「土砂災害警戒情報※」が発表されていなくても身の危険を感じたらすぐに避難しましょう。

※土砂災害警戒情報…大雨による土砂災害発生の危険性が高まったとき、気象庁と京都府から共同で発表されます。この情報が発表されたときは土砂災害が非常に起こりやすい状況ですので警戒を強めてください。

土砂災害警戒区域と土砂災害特別警戒区域

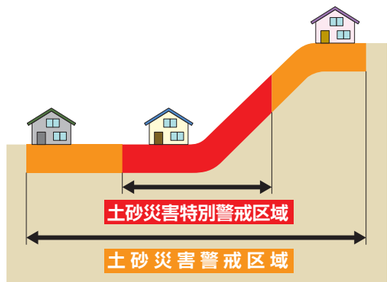
土砂災害発生のおそれがある区域は、京都府により指定されており、その危険度に応じて「土砂災害警戒区域」と「土砂災害特別警戒区域」に分かれています。

土砂災害警戒区域（通称イエローゾーン）

土砂災害が発生した場合に、住民などの生命または身体に危害が生じるおそれがあると認められる区域であり、危険の周知、警戒避難体制の整備が行われます。

土砂災害特別警戒区域（通称レッドゾーン）

土砂災害が発生した場合に建築物に損壊が生じ、住民などの生命または身体に著しい危害が生じるおそれがあると認められる区域で、特定の開発行為に対する許可制や、建築物の構造規制などが行われます。



※急傾斜地の崩壊のケース

土砂災害に対する心構え

土砂災害は事前予測が難しく、突発的に起こることもあります。土砂災害に対する心構えを日頃から持っておきましょう。

早めの避難

台風の接近など、あらかじめ災害の発生が予見できる場合は、前兆現象や避難情報の発表を待たずに、土砂災害警戒区域などから立退き、安全な場所へ避難しましょう。

土砂災害に遭遇したら

土砂災害が発生してから避難するのは困難です。事前に土砂災害警戒区域などの範囲を確認し、土砂の流れる方向に対し、直角に逃げるようにしましょう。

命を守る最低限の行動

もし立退き避難が間に合わず、土砂災害が近くで発生してしまった場合は、むやみに屋外に避難するより、建物の 2 階以上に避難し、安全を確保しましょう。

地震でも発生する

土砂災害は雨だけでなく、地震によって発生する場合があります。地震によって地下の深いところまで地盤がゆるむため、その後の余震や降雨でも土砂災害を引き起こす危険があります。

避難時の心得・注意点

避難指示が発令されたら、速やかに危険な場所から避難しましょう。

過去の災害では、避難途中で災害に巻き込まれ犠牲になられた方もいます。情報と現状をもとに自らが判断し、早めの避難を心がけましょう。

いろいろな避難の方法

立退き避難

気象情報や防災情報をもとに、早めの避難を心がけましょう。避難場所だけでなく、安全な親戚・知人宅も避難先と考えられます。

逃げ遅れたら

近隣の安全な場所への避難

大雨や強風などにより、長距離の移動が危険をともなう場合には、避難場所にこだわらず、「近隣の安全な場所」へ避難しましょう。

逃げ遅れたら

屋内の安全な場所への避難

最低限の避難行動として、建物の 2 階以上や、斜面とは反対側の部屋に移動して、安全を確保しましょう。

災害に危険性が低いところに立地しているなど、そこが安全だと判断できる場合は、親族や知人・友人宅、ホテルなどに移動することも避難の一つです

避難とは難を避けること、つまり安全を確保することです。安全な場所にいる人は、避難場所に行く必要はありません。

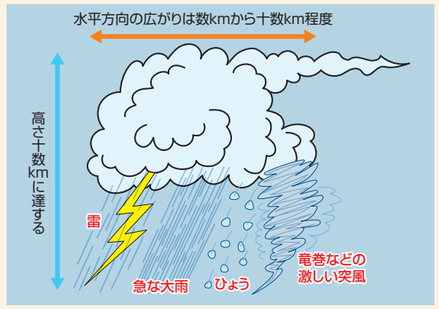
積乱雲（雷雲）に注意しましょう

大気の状態が不安定なときには、積乱雲（雷雲）が発達して、急に強い雨が降ったり、雷や竜巻が発生しやすくなります。

近年頻発している豪雨災害の原因とされる線状降水帯も、複数の発達した積乱雲の集合体が同じ場所を通過または停滞する気象現象です。

発達した積乱雲の近づく兆し

- 真っ黒い雲が近づき、周囲が急に暗くなる
- 雷鳴が聞こえたり、雷光が見えたりする
- ヒヤッとした冷たい風が吹き出す
- 大粒の雨や『ひょう』が降り出す

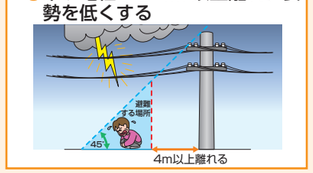


急な大雨に注意

1. すぐに水辺から離れる
2. 浸水した場所に注意する
3. 地下道は、特に注意する

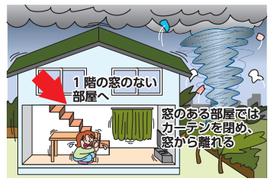
雷に注意

1. 雷鳴が聞こえたらすぐ避難する
2. 建物や自動車の中へ避難する
3. 木や電柱から 4m 以上離れ、姿勢を低くする



竜巻に注意

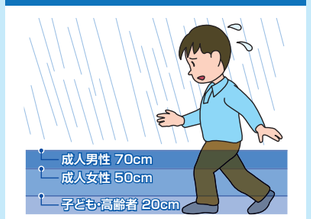
1. 頑丈な建物の中へ避難する
2. 屋内でも窓や壁から離れる



浸水が始まる前の早めの避難行動を

浸水が始まると、水深が浅くても移動することが困難になります。気象情報や河川の水位情報をもとに、身の危険を感じたら直ちに避難しましょう。車の移動も故障や渋滞に巻き込まれるおそれがあるため、徒歩での移動を心がけましょう。

歩行が困難になる浸水の深さ



ドアが開かなくなる浸水の深さ

車が止まってしまう浸水の深さ

立退き避難の注意点

避難するときは、隣近所で声を掛け合い、なるべく複数人で避難するようにしてください。
危険な箇所は避けて、遠回りでも安全な道を歩いてください。

移動は二人以上で、みんなで助け合って避難を

一人だと、いざというときに助け合えません。避難するときは隣近所のお年寄りや障がいのある方に声をかけ、協力して避難しましょう。

避難は動きやすい服装で

長靴やサンダルは危険です。運動靴をはき、両手が自由になるよう持ち物はリュックサックに入れて避難しましょう。

夜間の避難は要注意！

夜間の避難は周りの状況が確認しにくく、非常に危険です。可能な限り暗くなる前に避難しましょう。

危険な場所には近づかない

地下道や地下空間、河川の近くは浸水の可能性が高く、危険です。また、斜面は崩れ落ちる危険があるので、近づかないようにしましょう。

流れのある場所には近づかない

ゆるやかな流れでも、ひざの高さになると大人でも歩くのが困難です。小さな河川や流れのある場所に近づかないようにしましょう。

浸水している場所には注意が必要

浸水している場所は茶色く濁っており、水路と道路の境や側溝、ふたが開いているマンホールの穴は見えません。やむを得ず水の中を移動するときは、棒で足下を確認するなど、注意しながら移動しましょう。